芥川竜之介『西方の人』注解（九）

R. Akutagawa' "SAIHO NO HITO" EXPlanolory Notes (IX)

中野恵海
吉田孝次郎

続西方の人

14 孤身

①「イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隠れ得ざりき。」――かう云ふマコの言葉は又他の伝記作者の言葉である。クリストは②度たび隠れようとした。が、彼のジヤアナリズムや奇蹟は彼に人々を集まらせてゐた。彼のイエルサレムへ赴いたのも③ペテロの彼を「メシア」と呼んだ影響も全然ないことはない。しかしクリストは十二の弟子たちよりも或は④橄欖の林だの岩の山だのを愛したであろう。しかもジヤアナリズムや奇蹟を行つたのは彼の性格の力である。彼はここでも我々のやうに矛盾せずにはゐられなかつた。けれどもジヤアナリストとなつた後、彼の孤身を愛したのは疑ひのない事実である。

⑤トルストイは彼の死ぬ時に「世界中に苦しんでゐる人々は沢山ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎをするのか？」と言つた。この名声の高まると共に自ら安じない心もちは我々にも決してない訳ではない。クリストは名高いジアナリストになつた。しかし時々大工の子だつた昔を懐かつてゐたかも知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをフアウスト自身に語らせてゐる。⑥フアウストの第二部の第一幕は実にこの吐息の作つたものと言つても善い。が、フアウストは幸ひにも⑦艸花の咲いた山の上に佇んでゐた。……

（注）

①イエス……家に入りて……　「マコ伝・第七章・二十四に「イエス此を去てツロとシドンの境にゆき家に入て人に知れざらん事を欲しが隠れ得ざりき」とある。

②度たび隠れようとした　「マコ伝」第八章・十三「イエス彼等を離れて復舟に乗むかふの岸に済れり」。「ルカ伝」第五章・十五・十六「イエスの声名ます〳〵揚りて許多の人々或は教を聴んとし或は病を医れんとて集り来れりイエス常に人なき処に退きて祈り給ひき」。「マタイ伝」、第十四章・十三に「イエスこれを聞て人をさけ舟に登りて其処を去さびしき処に往給ひしが衆人きゝて歩行にて彼に従へり」とある。

③ペテロの彼を「メシア」と……　「マタイ伝」・第十六章・十六・に「シモンペテロ答けるは爾はキリスト活神の子なり」とある。

④しかも　そのくせ、ほどの意。

⑤トルストイは彼の死ぬ時……　ロマン・ローランの「トルストイの生涯」に「……彼は臨終の床で、自分自身のためではなく不幸な人々のために泣いた。そして歔欷のうちに言った。『地上には幾百万の人々が苦しんでいる。どうしてあなたがたは、私ひとりのことをかまうのか？』」とある。

⑥フアウストの第二部の第一幕……　「太陽が遂に姿を見せた――しかし悲しいかな。己の眼はめくるめいて、光を見る痛みに堪えかねて面をそむける。……」。

⑦艸花の咲いた山の上……　「フアウスト・第二部第一幕・優雅な土地」に「フアウスト花の咲く草地に、疲れて不安な身を横たえ眠ろうとつとめている」の下書がある。

（解）

「イエス……家に入りて人に知られざらんことを願いしが隠れ得ざりき。」――このマコの言葉（マルコ伝第七章24節）は他の三人の伝記作者の言葉でもある。そのようにクリストはたびたび〔人前から〕隠れようとした。が、彼の言論や文筆活動、それから彼の行なう奇蹟は彼の周囲に〔大勢の〕人々を集まらせていた。〔なるほど〕彼が〔死地と知りつつ〕イエルサレムに向かった〔決然たる行動〕も、ペテロから「メシア（救世主）」と呼ばれた影響（励まされたこと）も皆無とは云えない。〔このようにクリストは弟子たちに親しんでいたとは云え、〕その弟子たちよりも橄欖の林だの、岩の山など〔人気のない静かな自然〕を愛したのではなかろうか。そのくせ、〔衆目を集める〕言論・文筆活動や奇蹟を行なったのは、彼クリストの〔積極的な〕性格の力にほかならない。彼はこの〔積極性と孤独とを合わせ持つという〕点でも我々人の子と同様に、矛盾なしにはいられなかった。〔こういう云い方は不遜に聞えるかも知れない〕けれども、クリストはジャアナリストとなってから、孤身を愛したことはまぎれもない事実である。トルストイはその臨終に「世界には苦しんでいる人は沢山ある。それなのになぜわたしのことばかり大騒ぎするか？」と云っている。有名になるにつれて、〔何ということなく〕自分ながら落ちつけなくなる〔不安になって、独りだけになりたがる〕というこの心もちは我々にも決してない訳ではない。〔故につぎのように思われる。〕クリストは高名なジャアナリストになった。しかしときどき〔何をしても他人の目を引かずにすんだ〕大工〔ヨセフ〕の子供だった昔をいまさらのように懐かしがっていたかもしれない。

ゲエテはこういう（やるせない）心をちを（文学作品）フアウストに語らせている。フアウストの第二部第一幕は実にこの（デエテの切ない）ため息から生まれたものと云ってもよい。それにしても詩劇中のフアウストは幸いにも美しい山上（自然）に独り浸っていた。……（クリストとゲエテとの差がこんなところにも考えられよう。）

（要旨）

高名になったクリスト（天才的文学者）たちに人々（俗人）がうるさく群がり集まって離れない、その煩わしさから、何とかそこから逃れてひとりだけの世界をもちたいと切望するクリストたちの心境を文献によって忖度し、同情と共鳴とを表現している。この悩みは当時、華々しい文名を馳せていた芥川が襲われていた彼の内面の姿に他ならず、彼はこの自己の切なる孤身愛への傾情にもとづいて、それを新約聖書中のクリストにさぐり、さらに他のクリストたち（トルストイ、ゲエテ）の上に及ぼしている。芥川は、この孤身愛を天才の積極的性格に根ざす矛盾とし、このために、無名年少の時代への懐旧の情（非社会的な）、自然への愛が抑えがたくなるのだと考察する。この芥川の心情体験からの類推に出発していること、そこにもクリストは「人の子」なりとの観点の独自性が濃厚に見られるばかりか、作家芥川の自尊心（自信）のほどがうかがわれる。それにしてもクリストたちの孤身愛の発生を「名声の高まると共に休んじない心もち」に見、その「心もちは我々にもけっしてないわけではない」とした芥川がその後いくばくもなく、遺書「或旧友へ送る手記」の中に「自殺の動機」と

して「何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。」と記しているのを思い合わせると、この「休んじない心もち」と、そこにつながる孤身への願いとが、いかに深痛なものだったか、この章が彼にとって、記さずにはおれないものであったかが考えられるのである。

そしてまた孤身への願いが芥川においても死の決意の後にもらされているのは、この願いの成就が死にまつものと彼には考えられたことによるのではなかろうか。

15　クリストの歎声

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか？」①と言つた。この歎声も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼ほど我々人間を知り、彼ほどボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステリツクに時々かう叫ばずにはゐられなかつた。阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。が、我々はそれ等の寺院にやはり彼の歎声を感ずるであらう。「どうしてお前たちはわからないか？」――それはクリストひとりの歎声ではない。後代にも見じめに死んで行つた、あらゆるクリストたちの歎声である。

（注）

①どうしてお前たちは……「マタイ伝」第十六章・五～十一に「その弟子むかふの岸に到りしにパンを携ふることを忘たり。イエス彼等

に曰けるは戒心してパリサイとサドカイの人の麪酵を慎めよ弟子たがひに論じて曰けるは是パンを携へざりし故ならんイエスこれを知て曰けるは信仰うすき者よ何ぞ互にパンを携へざりしことを論ずる乎未だ悟らざるか五千人に五つのパンを予しとき幾籃ひろひし乎また四千人に七つのパンを予しとき幾籃ひろひしや爾曹これを記ざるかパリサイとサドカイの人の麪酵を慎めとはパンにつきて言るに非るを何ぞ悟らざる」とある。他に「マコ伝」第八章・十四〜二十一。

又、クリストがその弟子たちに理解されなかったことについては本篇、「21・文化的クリスト」参照。

（解）

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか？」と言った。この歎声もたびたび繰り返されている。それ（彼らの理解力の乏しさ）は、彼（クリスト）ほど我々人間を知り、彼ほどボヘミア的〔不羈自在に行動する〕生活を続けた人の目には滑稽に見えるだろう〔と思われ、笑ってすませられるところと我々には思われる〕。しかし彼は〔これを重大にとり〕激情的にときどきこう叫ばずにはいられなかったのだ。〔これはまことに道理のあることで、クリストを理解できない〕阿呆どもは、クリストを殺した後、世界中に大寺院を建てて〔クリストの精神にそった積りになって〕いる。が、我々はそれら大寺院を見るにつけて〔も〕やはり彼の歎声を〔なるほどと〕感ずるであろう。〔考えてみると〕「どうしてお前たちはわからない？」――この言葉はクリストだけの歎声ではない。後世にもみじめに死んで行ったあらゆる〔詩的正義に生きる天才〕クリストたちの歎声である。

（要旨）

この章に見られるものは、まず、クリストの精神と周囲とのかみ合わなさであり、それに対するクリストのむきになったいらだたしさである。そしてすぐれた人間理解者でありながら、また奔放不羈の生活者でありながら、クリストはこの点においては決して許そうとはしない。この「どうしてお前たちはわからないか？」というヒステリックな叫びに芥川は、周囲に自己の真実を働きかけることに倦まない情熱をみるとともに、この歎声に天才と天才を囲む社会との宿命的な関係を観じている。天才がいくら社会に働きかけたところで通じるものではない。その努力はむなしく絶望に終らざるを得ない。いつの時代もあらゆるクリストはついに孤絶を免れない。芥川はこの感慨を2年前、「侏儒の言葉」中の「天才」（大正14年3月・文芸春秋）につぎのように記している。「耶蘇『我笛吹けども、汝等踊らず』彼等『我等踊れども、汝足らはず』」

16　サドカイの徒やパリサイの徒

サドカイの徒①やパリサイの徒はクリストよりも事実上不滅である。この事実を指摘したのは「進化論」の著者②ダアウインだつた。彼等は

今後も③地衣類のやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は彼等には正に当嵌まる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油断のない処世術を講じてゐる。マリアは恐らくクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。⑤ゲエテをベエトホオヴエンの罵つたのは正にゲエテ自身の中にゐるサカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだつた。

（注）

①サドカイの徒やパリサイの徒　ともに、キリスト時代に最も盛に行われたユダヤ教の一派で、モーゼ律法の厳格な遵守を主張、これを守らない者を汚れた者として斥けた。イエスはその偽善的傾向を激しく攻撃した。「マタイ伝・第十六章・一―三に「パリサイとサドカイの人きたりてイエスを試んとて天の休徴を我儕に見せよと曰ければ彼等に答けるは爾曹暮には夕紅に由て晴ならんと言晨には朝紅また曇に由て今日は雨ならんといふ偽善者よ空の景色を別ことを知て時の休徴を別ち能はざる乎」とある。

②ダアウイン　Charles Robart Darwin（一八〇九―八二）イギリスの生物学者。「種の起源」（一八五九）により生物進化論を唱えた。

③地衣類　菌類と藻類との共生体。ウメノキゴケ等のコケの類。

④適者生存　生存競争の結果外界の状態に最もよく適したものだけが生存繁栄し、適していないものは淘汰されて衰退滅亡する現象。自然淘汰の結果を示す。

⑤ゲエテをベエトホオヴエンの……　ベートーベン（Ludwig Van Beethoven）よりベッティーナ・ブレンターノ宛の手紙に「……昨日われわれ（ゲーテとベートーベン）は帰り途で大公家全部の方々に出くわした、――ルードルフ公は私に向かって帽子をとられ、大公妃も私に先んじて御挨拶をなさった――ゲーテの方をながめると、一行が彼の前を通り過ぎて行かれる時、帽子を脱ぎ、低く腰を屈めて脇の方に立っているので私はおかしくなった」とある。

（解）

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事実上不滅不死である。この事実を指摘したのは「進化論」の著者ダアウインだった。彼らは〔下等な〕苔類のようにいつまでも地上に生存〔蔓延〕するであろう。「適者生存」（環境に適応できるもののみが生存繁栄するという意の熟語）とは彼らにぴったりする言葉である。〔まったく〕彼らほど地上の適者はない。彼らは生きることに何の感激感動も求めず〔ただもう功利打算に血眼になり〕油断のない処世術にあくせくしている。守らんとするもの〔世俗的調和をひたすら重んじる母〕マリアは恐らくクリストがこういう人間でなかったことを悲しんだであろう。ベエトホオヴエンがゲエテをった罵のはまさにゲエテの中に巣食うサドカイの徒〔的要素〕やパリサイの徒（的要素）を罵〔るところに主眼があ〕ったのだった。

（要旨）

『西方の人』注解

前章をうけて、天才クリストの躍気の働きかけをもむなしく悲劇に終らせる俗物の逞しき「阿呆」ぶりを、この章から数章に亘って、痛烈に摘出し展開する。彼らは永遠に死滅を知らない地上の適者であり、生きる感激――これこそ人生の価値――もなしに処世術に汲々として、苔のように無意味にはびこるばかりである。「守らんとするもの」マリアはクリストがこういう適者でなかったことをさぞかし悲しんだであろう。それも無理とは云えまい、〔大天才〕ゲエテでさえも一面この適者性を持って天寿を全うしたのであるから。そしてゲエテにむかってそのことを看破し、罵ったのはベエトホオヴェンだ。この題名そのものに、またこの章全体に人世を価値的に生きる事の困難さとその矛盾性が痛切にうかがえる。

17 ①カヤパ

祭司の長だつたカヤパにも後代の憎しみは集つてゐる。彼はクリストを憎んでゐたであらう。が、必ずしもこの憎しみは彼一人にあつた訳ではない。唯彼を推し立てることのクリストを憎み或は妬んだ大勢の人々に便利だつたからである。カヤパはきらきらに②袍を着下し、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこに③ピラトと共に意気地のない④精霊の子供を嘲つてゐる、燃えさかる松明の光りの中に。……

（注）

①カヤパ　イエスを審問した大祭司。

②袍　礼装用の上衣。

③ピラト　正篇「30　ピラト」参照。

④精霊の子供　イエス・キリストのこと。

（解）

〔後述する磔刑の命令者ピラトと同様に〕祭司の長カヤパにも後代の憎しみは集まっている。〔もちろん〕彼はクリストを憎んでいたであろう。が、クリストを憎んでいたのはなにも彼一人だったわけではなくて、他にも大勢いた。ただカヤパを先頭に押し立てることがクリストを憎んだりあるいはねたんでいた大勢の人々に便利だったからである。カヤパはきらきらする袍（礼装用の上衣）をゆったりと着装し、冷然とクリストを眺めていたであろう。〔苔的人間のみはびこる〕この世の中というものはそこに（こういう仕組のもとで）〔役人〕ピラトと一緒になって（この解釈の根拠は正篇30）この世の弱者（生活力の弱者）たる聖霊の子供を嘲っているのだ。〔形だけは、闇の世を照らすかのように〕燃えさかる松明のものものしい光の中で。

（要旨）

この章は、前の第16章をうけて、俗物どもの苔的生き方を、クリストを死に追いやる審問者として後世の憎しみを買っているカヤパに結びつけて、そのカヤパのクリスト審問こそは、彼同様、クリストを憎み妬んでいた大勢の苔的人間がクリストを葬る手段としてカヤパをもち上げて、させた行為であると、これまでの通説に対して独創的な判

断を打出し、いかにカヤパが威儀を示そうとも、それは苔的人間達の傀儡にすぎないとする。そして彼等地上の適者たちは「後代の憎しみ」をカヤパひとりに負わせているのだ。この卑劣なる苔的人間のはびこる現世はこうしてピラト的官憲と一緒になって生活能力（現実への適応性）に弱い聖霊の子供を嘲弄しているのだ。しかも表面はいかにも厳粛なものものしさを装うずるさを忘れないのだとする。ここに処世術を知らず一徹に自己の天才に生きる聖霊の子にとって、この愚劣な世に生存を続けることはとうてい不可能なのだという、生きることに絶望した芥川の感慨が托されていることは無論であろうが、現世への愛想づかしと、自決する自己への肯定とが、暗に示されているのが注意される。

18　人の盗人たち

クリストの死の不評判だつたことは①彼の十字架にかかる時にも盗人たちと一しよだつたのに明らかである。盗人たちの一人はクリストを罵ることを憚らなかつた。彼の言葉は彼自身の中にやはり人生の為に打ち倒されたクリストを見出したことを示してゐる。しかし②もう一人の盗人は彼よりも更に妄想を持つてゐた。クリストはこの盗人の言葉に彼の心を動かしたであらう。この盗人を慰めた彼の言葉は同時に又彼自身を慰めてゐる。

③「お前はお前の信仰の為に必ず天国にはひるであらう。」

後代はこの盗人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盗人には、――クリストを罵つた盗人には軽蔑を示してゐるに過ぎない。それは正にクリストの教へた詩的正義の勝利を示すものであらう。が、彼等は、――サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盗人に賛成してゐる。事実上天国にはいることは彼等には無花果や真桑瓜の汁を啜るほど重大ではない。

〔注〕

①盗人たちの一人は……　「ルカ伝」第二十三章・三十九に「懸られたる罪人の一人イエスを譏て曰けるは爾もしキリストならば己と我儕を救へ」とある。

②もう一人の盗人は……　「ルカ伝」第二十三章・四十―四十二に「他の一人とたへて彼を責め曰けるは爾おなじく審判を受ながら神を畏ざる乎我儕は当然なり行ことの報を受なれど此人は何も不是事は行ざりし也斯てイエスに曰けるは主よ爾国に来ん時我を憶たまへ」とある。

③お前はお前の信仰の為に……　「ルカ伝」第二十三章・四十三に「イエス答けるは誠に我なんぢに告ん今日なんぢは我と偕に楽園に在べし」とある。

（解）

クリストの死が当時不人気だったことは彼が十字架にかかるときにも盗人たちと一緒にされたことで明らかだ。盗人の一人は「お前がキリストなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」とクリストを

罵ってはばからなかった。彼のこの言葉は彼自身の心中に、やはり、期待はずれで、現実人生のために打ちのめされ、夢破れた敗残者クリストを見てとったことを示している。しかしもう一人の盗人はこの盗人よりもさらに〔うわ手の〕勝手な空想を持ってい〔て、イエスに「あなたが王になられるときにはわたしを思い出して下さい」といっ〕た。クリストはこの盗人の言葉に心を動かしたのであろう。この盗人を慰めた彼のつぎの言葉は同時にまた彼自身を慰める言葉でもあった。

「おまえはおまえの信仰の力で必ず天国にはいるであろう。」

後代〔の人々〕はこの盗人に同情を示している。が、前の盗人（クリストを罵った盗人）にはただ軽蔑を示しているにすぎない。これはまさにクリストが教えた詩的正義の勝利を示すものといってよかろう。が、彼ら（サドカイの徒やパリサイの徒）は今日でもひそかに（心中で）この罵った盗人に賛成している。事実上（現実的にいって）詩的正義など彼らに〔とって〕は無花果や真桑瓜の汁をするほど〔に〕重大〔な問題〕ではない。

（要旨）

クリストが大勢の人々から憎まれ妬まれていたという前章をうけて、その死が一般の同情をあつめなかった証明として盗人たちと一緒に処刑されたことをあげることから本章が始まる。その一人は救ってもらえたらという万一の期待が外れてクリストを罵ったが、もう一人の盲信ぶりはキリストを動かし慰めの言葉をはかせ、それはまたクリスト自身の慰めにもなっているのである。後代はこの後者に同情を、前者には軽蔑を示している。その限りでは、クリストの説いた詩的正義の勝利といえるかも知れない。だが苔的俗物は、今日も依然として、心ひそかに、実際は前者に賛成しているのであって、天国よりも衣食を重大視しているのである。

ここに、前章に続いて彼らの厚顔無恥の処世術の指摘がある。また、クリストは今日も決してうけいれられてはいないのだ、天才と俗世とはいつになっても、とうてい相いれないのだ、とする理想主義者の現世への絶望が見られる。

ところでクリストに未来の王者を期待して前者の盗人を戒めている後者の心を芥川は「妄想」と表現し、さらにこの後者へのクリストの言葉の中に、聖書に見当らない「お前の信仰のために」という一言を付加しているのが芥川独自の解釈と判断とを示すものとして注意される。根拠なき勝手な思考を意味する「妄想を」をこの盗人に用いたのは、クリストに文字通りのユダヤの王を期待したこの盗人が決してクリストの理解者ではあり得ないとする芥川の判断の表現にちがいない。クリストの説く理想の世界は、現実には存在しない「天国」であり、それはただ信仰によってのみはいれるものであり、それなくしては不可能なのだとする。芥川のこの「信仰」についての至上的な考え方は既に正篇第16章「奇蹟」において「科学的真理」に叶うものとしているところにも認められるものであり、それはその章に記したように、真理の知的追求のむなしさから、屈折しつつ定着した、自己の真実、絶対への主観的、主体的燃焼の積極的肯定にもとづくものであ

り、この立場から前記のようにクリストの言葉の中に、聖書にない「お前の信仰のために」という主体にかかわる条件を挿入せずにいられなかったと考えられる。またこれが芥川の最晩年における人生哲学であったろうと思われる。

19 兵卒たち

①兵卒たちは十字架の下にクリストの衣を分ち合つた。彼等には彼の衣の外に持つてゐたものは見えなかつたのである。彼等は定めし肩幅の広い模範的兵卒たちだつたのに違ひない。クリストは定めし彼等を見おろし、彼等の所業を軽蔑したであらう。しかし又同時に是認したであらう。クリストはクリスト自身の外には我々人間を理解してゐる。彼の教へた言葉によれば、②感傷主義的詠嘆は最もクリストの嫌つたものだつた。

（注）

①兵卒たちは……「ヨハネ伝」第十九章・二十三―二十四に「兵卒どもイエスを十字架に釘し後その上衣をとり四に分て各その一を取また裏衣を取り此裏衣は縫なく上より渾く織るもの也ければ互に曰けるは之を裂ずして誰の禹にならんか闄にすべし」とある。

②感傷主義的詠嘆　正篇「26　幼な児の如く」参照。

（解）

〔現実的な、或は貪欲な〕兵士たちはクリストをつけた十字架の下でクリストの着物を分け合った。彼らにはクリストの着衣以外にクリストの持っていた〔高貴な〕もの（精神）は目に入らなかったのだ。彼らはさだめし肩幅の広い〔肉体的にすぐれ、命令に忠実な〕模範的兵卒たちだったのに違いない。クリストはさだめし彼らを〔十字架の上から〕見下し、彼らの仕業を軽蔑したであろう。しかし、また同時に〔格別非難もせず、それで〕よしと認めたであろう。〔なぜなら〕クリストは彼自身の他はわれわれ人間〔の心の動き〕を理解している〔からだ。〕彼の教えた言葉によれば、現実をわきまえずに悲しみの詠歎などに浸っての自己満足は最もクリストの嫌ったものだった。

（要旨）

前の18章の、表面はともかく内容は現実生活しか考えない俗物の見本として十字架下の兵卒たちの所業をとらえ、彼等に処刑されるクリストが彼らのその仕業をどう受けとめたかを芥川は、自己のクリスト観にもとづいて観察することによって、俗物の手のつけようのなさとクリストの人間認識の深さとを考え、その絶望的な隔絶ぶりに対する痛感を表現している。

愛と理性による人間理解の空しい一方通行に飽くまでも耐えて感傷主義的詠歎を排するところに自己の絶対化を目指すクリストの不抜の精神を見ると同時にそこにまた芥川は、抑えようのない厭世の思いを一層深めたであろうことが推察される。

20 受難

十字架にかかつたクリストは多少の虚栄心を持つてゐたものの、彼の内体的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊に十字架を見守つてゐた、マリアを眺めることは苦しかつた訳である。が、彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と云ふ必死の声を挙げた後も（たとひそれは彼の愛する讃美歌の一節だつたにもせよ）彼の息の絶える前には何かおほ声を発してゐた。①我々はこのおほ声の中に或は唯死に迫つた力を感ずるばかりであらう。しかしマタイの言葉によれば、②「殿の幔上より下まで裂けて二つになり、又地震ひて岩裂け、墓ひらけて既に寝ねたる聖徒の身多く甦へつた。彼の死は確かに大勢の人々にかう云ふショックを与へたであらう。（マリアの脳貧血を起したことを記してゐないのは新約聖書の威厳を尊んだからである。）クリストの一言一行に永遠の註釈を与へてゐる③パピニさへこの事実はマタイを引いてゐるに過ぎない。彼自身を欺いてゐるパピニの詩的情熱はそこにも亦④馬脚を露してゐる。クリストの死は事実上彼の予言者的天才を妄信した人々には——彼自身の中に⑤エリヤを見た人々には余りに我々に近いものだつた。従つて又⑥炎の車に乗つて天上に去るよりも恐しかつた。彼等は唯その為にショックを受けずにはゐられなかつたのである。しかし、年をとつた祭司たちはこのショックに欺かれはしなかつただろう。

「それ見たことか！」

彼等の言葉はイエルサレムからニウヨウクや東京へも伝つてゐる。イエルサレムを囲んだ橄欖の山々を最も散文的に飛び超えながら。

（注）

①何かおほ声を発して……「マタイ伝」第二十七章・四十六—五十に「イエス大声に……イエス また大声に呼りて気絶たり」とある。

②殿の幔上より下まで……「マタイ伝」第二十七章・五十一—五十三に「殿の幔上より下まで裂て二となり又地ふるひ磐さけ墓ひらけて既に寝たる聖徒の身おほく甦へりイエスの甦れる後墓を出て聖城に入おほくの人に現れたり」とある。

③パピニ　正篇「29 ユダ」参照。

④馬脚を露して……　つつみかくしていた事があらわれる。ばけの皮がはがれる。

⑤エリヤ　Elijah 前九世紀頃のイスラエルの予言者で、メシヤの到来と結びつけられた。

⑥炎の車　正篇「25 天に近い山の上の問答」参照。

（解）

十字架にかかったクリストは、多少、人前での体裁を気にはしていたものの、肉体的苦痛にも精神的苦痛にも襲われたであろう。ことに十字架を見守っていた〔母〕マリアを〔十字架上から〕眺めることは〔子として〕苦しかったわけである。が、〔それはそれとして〕彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ（わが神、わが神、どうしてわたしを

お捨てなさる？）」という必死の声を挙げた後も（たといそれは彼の愛する讃美歌の一節だったにもせよ）息の絶える前には何か大声を発していた。我々はこの大声の中にあるいはただ死に直面した〔最期の悲痛な〕力を感ずるばかりであろう。しかしマタイ伝によると「殿の幔上より下まで裂けて二つになり、また地震ひて岩裂け、墓ひらけてすでに寝ねたる聖徒の身多く甦へつた〔とある〕。彼の死は確かに大勢の人々にこういうショックを与えたであろう。（「母」マリアが脳貧血を起こしたことを記していないのは新約聖書が威厳を尊んだからである）クリストの一言一行に水遠〔不朽〕の権威的注釈を加えているパピニさえこの箇所はマタイ伝を〔そのまま〕引いているにすぎない。自分で意識的に真実に対して、目をつぶるパピニの詩的情熱〔の正体〕はそこでも〔「ユダのクリストを売ったのを大きい謎に数えている」（正篇29章）のと同様に〕またばけの皮を現わしている。クリストの死は事実上彼の予言者的天才を妄信した人々には即ちクリスト自身の上にエリヤを見てとった人々の目には〔それが〕あまりにも我々普通の人間の死に近く見えるものだった。それがためにまた〔エリヤが〕炎の車に乗って天上に去った（列王記下巻第2章による）よりも恐しく思われた。ただその〔恐しさの〕ために彼らはショックをうけずにはいられなかったのである。しかし〔さすがに〕老年の祭司たちはこのショックに真相を見る目を曇らされることはなかったであろう。

「それ見たことか！〔やはり人間にちがいないじゃないか〕〔とつぶやいたであろう。〕この老祭司たちの言葉（考え）は〔今や〕世界中に広くあまねく行きわたっている。エルサレム〔というクリストが処刑された小地域に閉じ込められることなく、それ〕をとり囲んだオリーブの山々をこの言葉はその形式よりもその意味内容の力で自由に飛び超えながら。

（要旨）

前章をうけて本章は、十字架上のクリストの最期に対する見解である。クリストを襲った心身の烈しい苦痛は虚栄心ではおさえ切れるものでなく、ことに彼を見守っている母マリアを眺めることは切なかった。が、それよりもはりつけで殺されて行く生きものとしての苦しみは言語に絶していて、神への必死の哀願、弱音の後もすさまじい断末魔の大声を挙げていた。そのため幔幕が裂け大地は震い、死者の蘇ったとマタイは記しているが、これはクリストのすさまじい死にざまが人々に与えたショックの大きさを語るものと受取るべきで、マリアが脳貧血を起したことを、威厳を尊ぶ聖書が記さないのは分かるが、クリスト研究の権威パピニがここをマタイの受け売りですませているのは文学者として恥ずべき正体をあらわしているものである。またクリストの妄信者にとっては、クリストの死にざまが、あまりにも我々人間とちがわなさすぎることが何よりものショックだった。しかし、その点、さすがに老齢の祭司たちは冷静さを失わず、「やはり神の子ではなく人の子だったじゃないか」と見てとっている。（この老祭司の言葉は芥川の創作）この真実をいいあてた言葉は、形式よりもその意味内容の力によって、さえぎられることなく、世界各地に広まってい

る。

受難のクリストには聖霊の子はかげを消してしまっている。情熱に燃えて生きていた日、母を無視してはばからなかったクリスト（正篇「17背徳者」・続篇「8ある時のマリア」）は、いま十字架の上で母の視線をおそれ苦しむ人の子である。いや、それだけではない、はりつけ柱に縛りつけられ槍でつき殺されるそのすごい死にざまは、断末魔に荒れ狂う生きものを感じさせる。マタイや妄信者がどううけとろうとも、その死にざまはあくまでただの人間のものだ。これに目をつむる者は文学者の資格を失う。クリストはその死においてあまりにもただの人間であった。人間はその死においてただの生きものと違いがない。人間が人間たる意味をもつのはその生き方であり、クリストの価値は人間としていかに生きたかの観点からのみ考えられるべしとする立場がこの真相追求の底にあるものとして、うかがわれよう。

21　文化的なクリスト

クリストの弟子たちに理解されなかつたのは彼の余りに文化人だつた為である。（彼の天才を別にしても）。彼等は大体は少くとも彼に奇蹟を求めるゐた。哲学の盛んだつた①摩伽陀国②の王子のクリストよりも奇蹟を行はなかつた。それはクリストの罪よりも寧ろユダヤの罪である。彼は③ロオマの詩人たちにも遜らない第一流のジヤアナリストだつた④。同時に又彼の愛国的精神さへ抛つて顧みない文化人だつた。（マコはクリスト伝第七章二十五以下にこの事実を記してゐる）。⑤パプテズマのヨハネは彼の前には駱駝の毛衣や蝗や野蜜に野人の面目を露してゐる。クリストはヨハネの言つたやうに洗礼に唯聖霊を用いてゐた。のみならず彼の洗礼（？）を受けたのは十二人の弟子たちの外にも売笑婦や税吏や罪人だつた。我々はかう云ふ事実にもおのづから彼に柔い心臓のあつたのを見出すであらう。彼は又彼の行つた⑥奇蹟の中に度たび細かい神経を示してゐる。文化的なクリストは十字架の上に最も野蛮な死を遂げるやうになつた。しかし野蛮なパプテズマのヨハネの⑦文化的なサロメの為に盆の上に頭をのせられてゐる。運命はここにも彼等の為に逆説的な悪戯を忘れなかつた。……

（注）

①摩伽陀国の王子　Magabha　古代、中インドにあった国で前六―七世紀頃から栄え、頻婆婆羅王及びその子阿闍世王がこの地を占め仏教の中心をなし後阿育王がこの国を中心とする全インド統一王国を建設した。

ここでは釈迦を意味するのであろうが、マカダ国は釈迦の修行の地で、釈迦はマカダ国の王子ではなく、ヒマラヤ山の南麓のカビラ城主の王子である。

②王子の　王子はの誤りであろう。

③ロオマの詩人たち　ヴェルギリウス（西暦前七〇―一九）ホラチウス（西暦前六五―八）などを指す。

④マコはクリスト伝第七章二五　「そは悪鬼に憑たる幼き女を有る婦イエスの事を聞て来り其足下に伏たるに因てなりこの婦はサイロ

ピニケに生まれしギリシヤの者なりしが悪鬼を其女より逐出し給はん事をイエスに求りイエス彼に曰けるは先児女に飽しむべし児女のパンを取て犬に投るは善らず婦こたへて曰けるは主よ然されど犬も案の下に在て児女の遺屑を食ふ也イエス婦に曰けるは此言に因て帰れ悪鬼は爾の女より出たり婦その家に帰しに悪鬼既に出て牀に女の臥たるを見る」（「マコ伝」・第七章二五―三〇）

⑤バプテズマのヨハネ　正篇、5、10、11、34章等参照。

⑥奇蹟の中に度たび……　正篇「16　奇蹟」等参照。又、「マタイ伝」第九章・二十二等。

⑦文化的なサロメ　正篇「34　クリストの友だち」参照。

（解）

クリストが弟子たちに理解されなかったのは、彼が天才だったからということは別にして、あまりに〔かけはなれて〕文化人だったためである。〔文化人クリストに対して見当ちがいにも〕彼らは大体彼に奇蹟を期待していた。〔彼はその期待を満たしてはいないが〕、そのクリストよりも哲学の盛んな摩伽陀国の王子（釈迦）は奇蹟を行なっていない。〔それを思うと〕この問題でまちがっているのはクリストよりもユダヤ〔の社会〕の方である。彼はロオマの詩人たちに劣らない第一流のジヤアナリストだった。同時にまた〔人類愛のためには〕愛国的精神さえ平気で投げ棄てるほどの文化人だった。（マルコ伝第七章25節以下にこの記事あり）バプテズマのヨハネは彼の前では駱駝の毛衣を着たり蝗や野蜜を食料としたりしてぶこつ者の特色を丸出しにしている。クリストはヨハネ伝〔第一章33節〕にあるように洗礼にただ聖霊だけを用いていた。〔ここにも文化人たることがしのばれるが〕それだけでなく、彼は洗礼を十二人の弟子たちのほかに、売笑婦、税吏、罪人〔など、人からいやがられる人々〕にも施している。我々はこういう事実からもしぜんと彼に柔かな心情のあったことを発見するであろう。彼はまた奇蹟を行なう中にも細かい気くばり（例、マタイ伝第九章22節）を示している。〔ところで〕この文化的なクリストは十字架の上で野蛮な死を遂げるようになり、野蛮なバプテズマのヨハネは文化的な（美しい上流生活者の）〔ヘロデ王妃の娘〕サロメによって首を〔銀〕盆の上にのせられて死んでいる。

運命はこんな点でも彼らに一見、矛盾を思わせる悪戯を忘れなかった。……

（要旨）

前章でクリストの人間であることを明確にした芥川は、本章では文化人、それも非常に高度の文化人として規定することで、その面目をつぎのようにまとめる。彼が弟子たちに理解されなかった一の理由は、あまりに文化的でそのために彼らの求めるほどの奇蹟を行なわなかったからである。また彼は第一級のジャアナリストであったと同時にその人間愛は愛国的精神を越えていた文化人だった。彼に洗礼を授けたバプテズマのヨハネを引合いに出していうと、野人のヨハネが洗礼に水を用いたのに対してクリストはただ聖霊を用いたのみならず、やさしい心の持主で人を区別せず、社会から忌み嫌われる種類の人々

に洗礼を施している。それから奇蹟を行っても、科学と矛盾しないよう細心の注意を払ったりしている。ところでこのように文化人としての面目を示したクリストは十字架上に最も野蛮な死を遂げ、野蛮なバプテズマのヨハネはお上品なサロメのために首を銀盆にのせられている。真の高貴（文化）と地上の高貴（文化）とはとうてい相容れないものなのだ。

サロメの振舞はお上品に見えるだけで真の文化とは無縁のものである。しょせんこの世は見せかけばかりで実体はいずれにせよ野蛮俗悪につきる。「運命」はそれに気づかない愚劣さをあざけるためにまぎらわしい悪戯をしたまでのことである。「文化人クリスト」はこの野蛮な現世にたえられる存在ではなかったのだ、と考えるところに知性人芥川の人世への究極的な見限りがあったのだろう。

22　貧しい人たちに

クリストのジヤアナリズムは①貧しい人たちや奴隷を慰めることになつた。それは勿論天国なぞに行かうと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた為もあるであろう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、彼等ばかりではない。我々も彼のジヤアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。②何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわけではない。③狭い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼のジヤアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジヤアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「予言者」は彼以後には流行してゐない、しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる為に、――ジヤアナリズム至上主義を推し立てる為にあらゆるものを犠牲にした。ゲエテは婉曲にクリストに対する彼の軽蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。――我々は④エマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

（注）

①貧しい人たちや……「マタイ伝」第七章三十一―三十四に「然ば何を食ひ何を飲なにを衣んとて思わずらふ勿れ此みな異邦人の求る者なり爾曹の天の父は凡て此等のものの必需ことを知たまへり爾曹まづ神の国と其義とを求よ然ば此等のものは皆なんぢらに加らるべし是故に明日の事を憂慮なかれ明日は明日の事を思わづらへ一日の苦労は一日にて足り」とあり、同第十九章・二十三―十四に「イエスその弟子に曰けるは誠に爾曹に告げん富者は天国に入ること難しまた爾曹に告げん富者の神の国に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し」とある。

②何度叩いても……「マタイ伝」第七章・七に「求よ然ば与られ尋よ然ばあひ門を叩よ然ば開かるることを得ん」とある。

③狭い門からはひる……「マタイ伝」第七章・十三―十四に「窄き門

より入よ沈淪に至る路は濶その門は大なり此より入もの多し命に至る路は窄その門は小し其路を得るもの少なり」とある。

④エマヲの旅びとたち　「ルカ伝」第二十四章・十三―五十三に「当日二人の弟子エルサレムより三里ばかり隔りたるエマヲと云る村に往けるに互に此等の所遇ども（イエスの十字架のこととその復活）を語あへり語り論ずる時にイエス自ら近づきて偕に往り然ど彼等の目迷されて知ることを得ざりき（略）二人の者の目瞭かに為て彼（イエス）を識り又忽ち其目に見ず為り彼等たがひに曰けるは途間にて我儕と語かつ聖書を解開ける時われらが心熱しに非ずや」とある。

（解）

クリストのジャアナリズムは〔この世の弱者〕貧しい人たちや奴隷を慰めることになった。こうなったについては無論天国などに行きたいと思わない〔この世の特権者、強者〕貴族や金持ちにとって〔その方が〕好都合だったためもあるであろう。しかし〔それは別としても〕クリストの天才は彼ら〔弱者〕を動かさずにはいなかったのである。いや、彼らだけでない、我々も彼のジャアナリズムの中に何か〔ある〕美しいものを見出している。〔現実人生は必ずしも彼キリストのいう通りではなく〕何度たたいても開かれない門があることは我々だって知らないわけではない。〔それにまた〕狭い門からはいることも幸福とは限らないことは分かっている。しかし彼のジャアナリズムはいつも〔イスラエルの〕無花果のように〔我々を引き込む〕快い甘みを持っている。彼は実にイスラエルの民が生んだ古今に珍しい〔大〕ジャアナリストだった。同時にまた我々人間が生んだ、古今に珍しい〔大〕天才だった。いわゆる「予言者」なるものの流行はクリストで終っている。しかし彼の一生は〔言論・文筆活動家の面で〕永久に我々を感動させるであろう。彼は十字架にかかることのために、すなわち言論・文筆活動至上主義を発揚するために〔他の〕一切を犠牲にした。ゲエテはやんわりとクリスト〔の一途さ〕に軽蔑を示している。〔それは〕ちょうど後代のクリストたちが〔超えんとするものと、守らんとするものとをたくみに平衡させている〕ゲエテをねたんでいるようなもので〔実は内心のひけめからである〕。――〔とにもかくにも〕我々はエマオの旅人たちのように我々の心を燃え立たせるクリスト（ルカ伝第二十四章32節）を求めずにはいられないであろう。

（要旨）

まず、クリストのジャアナリズムがこの不合理な世の中の弱者を感動させ慰めることになった。「茫々とした人生の中にたたずんでいる」（正篇35章）我々も、彼のジャアナリズムの中に「何か美しいもの」を感じている。彼の教えるすべてがその通りとは思えないが、それにも関わらず彼のことばはいつも心にとけ入る甘い味わいをもっている。彼こそ人類の生んだ古今に稀有の一大文筆家であり、大天才だ。「予言者」はすたっても、彼の一生の活動は永久に我々を感動させるだろう。彼は死刑を承知で言論文筆運動至上主義を起こすため、そしてそれを成就させるため一切を犠牲にした。クリストたちの一人ゲエ

テは遠まわしにこの一途さに軽蔑を表明しているが、それは及ばぬ妬(ねた)みからで、我々は索寞(さくばく)たる心をしんから燃え上がらせてくれるクリストを求めずにはいられないのだ。

芥川の人生におけるクリストの意味の総括(そうかつ)である。クリストを古今稀有な大天才とする所以は、その作品が社会の弱者を慰め、かつ知性の生活を求める「我々」に「何か美しいもの」を示して、この味気ない人生に何かほのぼのとした潤いをもたらすところにありとし、つぎに、こういう文筆活動を至上絶対として処刑を覚悟で一切を犠牲にした彼の一生こそ「我々」の心を動かし燃え上がらせるものであるために、「我々」はクリストを求めずにはいられないのだ、と本章を要約してよいだろう。

この章で弱者への「慰め」と、芥川が「我々」におけるクリスト作品の意味として記している「何か美しいもの」・「無花果のよう」な「甘み」とが同質であることは、この文の「貧しき人々に」という題名からも考えられるのであり、それはまた芥川の文学（詩美）観の内容とも繋いで考えるべきものであろう。さらにその作者クリストを「我々」の心を燃え上がらせる天才として求めずにはいられないとした芥川が、本章を終章とする本篇の脱稿をまって自決したことを思うと、本章が、作家芥川の究極的到達点の質を語るものとして注目されなければならないだろう。

（本学教授―国文学）
（本学講師―国文学）